

特集 1

「多みんぞくニホン」のかたち

—多文化「共創」社会の実像—

特集の趣旨

本特集は、長崎大学多文化社会学部シンポジウム『『多みんぞくニホン』のかたち：多文化『共創』社会の実像』（2017年7月28日開催。主催：長崎大学多文化社会学部、共催：ワンアジア財団寄附講座「共生するアジアの多文化社会」・長崎大学重点研究課題『『リスク社会』を生き続けるための人文社会科学の超域的研究拠点形成』）をもとに編集されたものである。シンポジウム開催の主たる目的は現在世界中で注目されている移民・難民問題、および、多文化共生にかかわる諸議論を日本という歴史・社会的な文脈で見つめ直すことである。

グローバリゼーション時代における人・モノ・情報の流れはますます活発化するとされてきたが、昨今のイギリスのEU離脱とアメリカ新大統領の誕生からうかがえるように、そうした流動性に反する動きが顕在化している。なかでも移民問題の政治化や移民への批判的な眼差しが大きな論争を呼び、モノ・情報の流れと比較して、人の流れに関する管理が強くなる一方である。

人類の移動は大昔から存在していたし、その移動による社会の多元化現象もけっして今日に始まったことではない。国際移民の問題がとりわけ注目されるようになったのは、国民国家システムの成立とその世界的な波及過程に遡るが、歴史的に見て既に久しい。しかし今日のような国際移民・難民問題の政治化はむしろ最近、1990年代後半に入ってから、注目されるようになったのである。

今では「移民危機」に関する言説がいたるところで目にすることができる。しかし移民は本当に「危機」だけをもたらししているのか。そうした危機は移民自身が生み出していると言うよりも、国民の均一化を理想とする近代的な国民国家というシステムを揺るがす少数者という移民の立場に対する恐怖から幻想されたものではないだろうか。ポーランド生まれのイギリス社会学者ジグムント・バウマンが喝破したように、昨今の外国人恐怖症、レイシズムと狂信的なナショナリズムの高まり、あ然とするほどの外国人排斥や人種差別主義、愛国主義を掲げる政党や運動、排外主義的な政治指導者の選挙での例を見ない成功の背景にはまさしく、こうした移民パニックが利用（悪用）されているにほかならない。

こういう状況だからこそ、他者との共生社会構築に向けた取り組みは、喫緊の課題として再び問われるようになっていく。もちろんこうした移民問題はけっして欧米諸国だけではなく、外国籍住民の比率が低いとはいえ、戦前から一貫して国際移民に関わりを持つ日本にとっても重要な課題である。

「単一民族国家」と謳われていた日本は、「多民族国家」であったことはすでに論をまたない事実である。しかしそうした多民族国家日本の内実に関して、必ずしも周知されているとは言えない。本シンポジウムはそうした「多みんぞく」を抱える「ニホン」の内実を知ること、他者との共生がいかにして可能になるのかを問うと共に、日本とアジアとの関係についての再考を促したい。

ここで「多みんぞくニホン」という表記について、少し説明しておきたい。漢字、ひらがな、カタカナの「多みんぞくニホン」を見て訝しく思う人も多いだろう。この言葉の表記は、2004年3月25日から6月15日まで約70日間にわたって、国立民族学博物館で開催された特別展示「多みんぞくニホンー在日外国人の暮らし」で使われたものである。当時大学院生だった筆者も中国帰国者3世として、特別展示の企画に参加した。

「多みんぞくニホン」をあえて漢字、ひらがな、カタカナと表記したのは日本社会の多様性を表すためであった。ひらがなの「みんぞく」は、第一に日本社会が単一民族、単一文化、単一言語という表現で認識され、あるいは理想としていた姿から、ますます逸脱しつつあるということを明らかにするため、第二に「民族」という漢字の表記がもつ民族主義、民族統一、民族国家などから想起しがちな政治的で、排他的なニュアンスを除去するため、第三に「エスニック的」集団の曖昧性を温存しておきたかったためである。日本には在日コリアの一部のように、「本国」「母国」と強い絆で結ばれ、民族として一体感をたえず表明している集団がいれば、「日系ブラジル人」のように日本において、ブラジルとは異なる特殊な集団として、帰属意識を構成しているグループもいる。こうした日本に住む外国人の多様性、その「エスニック的」集団の曖昧性を強調するために、ひらがなの「民族」を用いたのである。

本シンポジウムがこの表記を用いたのは、上記のような特別展示に込められた意図に賛同しているからだけではない。むしろ10年も以上前に開催された「多みんぞくニホン」という特別展示を手がかりに、日本社会の多文化の内実とその歴史に関する理解の深化を目指してみたいと思ったからである。そのため、今回は、外国籍住民の人口比率が最も高く、多文化「共創」モデルとなり得る新宿区の事例を大東文化大学の名誉教授川村千鶴子、移民の子どもに対して新しいアプローチと研究方法を確立した早稲田大学教授川上郁雄の両先生に講演をお願いした。

本来ならば、もう一人の講演者を特別展示「多みんぞくニホン」の立案者でもある国立民族学博物館の元教授庄司博史先生にお願いする予定だった。なおご自身の都合により、本シンポジウムに参加しなかったものの、参加を見送らざるを得なかった。大変恐縮だが、代わりに、特別展示にも関わり、本シンポジウムを企画する筆者が末席に名を連ねることになったのである。

なお採録するにあたって、シンポジウムの発表順を変えて編集したことをお断りしておきたい。南論文は「多みんぞくニホン」そのものを取り上げていることから、わかりやすさを考慮して特集のイントロとして冒頭に持ってきた。実際シンポジウムを聞いた多文化社会学部の学生から、そのような感想が寄せられた。

しかし今回のシンポジウムだけで「多みんぞくニホン」を理解できるとは到底思っていない。今後さらなる企画を積み重ねていく必要がある。それは日本で唯一「多文化社会」の名を冠する学部、そして新しい「学」の体系として「多文化社会学」の構築を目指す学部の責務でもあると思う。本特集がその一つのきっかけになれば幸いである。

（南 誠）

【参考文献】

- A. アバドゥライ（藤倉達郎訳）（2010）『グローバリゼーションと暴力—マイノリティの恐怖』世界思想社。
- 伊豫谷登士翁（2015）「グローバリゼーションの時代における『国境の越え方』」（佐藤卓己編『岩波講座現代第5巻歴史のゆらぎと再編』、95-118）岩波書店。
- ジグメント・パウマン（伊藤茂訳）（2017）『自分とは違った人たちとどう向き合うか：難民問題から考える』青土社。
- 庄司博史編著（2004）『多みんぞくニホン—在日外国人のくらし』千里文化財団。
- 庄司博史、金美善編（2006）『国立民族学博物館調査報告64多民族日本の見せ方—特別展「多みんぞくニホン」をめぐる—』遊文舎。